２　「土佐日記」 ─中古の日記

21年度　東海大学

★　次の古文を読んで、設問に答えよ。

　昔、と言ひける人は、に渡りて、帰りア来ける時に、船に①べき所にて、彼の国の人、むまのはなむし、別れをＢしみて、しこの作りなどしける。イあかずやありけむ、ウの夜の月②づるまでⅠぞありける。エその月は海よりぞ出でける。これを見てⅡぞ仲麿の、「我が国には、オかかる歌をⅢなむ、神代より神も詠み給ひ、今は上・中・下の人もかうやうに別れを惜しみ、喜びも③あり、しびもある時には、詠む」とて詠め④りける歌、

　　青海原　ふりさけみれ⑤なる三笠の山に出し月かも

とⅣぞ詠めりける。

（注１）春日なる三笠の山に出でし月……春日と呼ばれる一帯から東に「三笠山」を望む場合、背後に春日山があるので山の麓、春日大社方面に近づかなくては三笠山からの月の出は望めない。のちに遣唐使に選ばれた藤原清河が春日（奈良県奈良市東部）での神事にかかわって詠んだと思われる歌を『萬葉集』が掲載している点から考えて、仲麿（仲麻呂）も遣唐使として出発する際に春日で神事が行われて、その時に月の出を見たのだと考えられる。行事という点から考えて午後の開催、夕刻にかけての宴席という流れを想定すれば、彼が見たのは夕方、東の空に昇る月だと思われる。

問１　傍線ア「来ける」のここでの「来」の読みとして、次の中から最も適当なものを一つ選べ。

　　Ａ　こ　　Ｂ　き　　Ｃ　く　　Ｄ　くる　　Ｅ　け

問２　傍線イ「あかずやありけむ」の解釈として、次の中から最も適当なものを一つ選べ。

　　Ａ　なかなか夜が明けなかったとでもいうのだろうか

　　Ｂ　なかなか夜が明けなかったのであろうか

　　Ｃ　漢詩づくりがお開きにならなかったのだろうか

　　Ｄ　漢詩づくりに飽き足りなかったとでもいうのだろうか

　　Ｅ　漢詩づくりに飽き足りなかったのだろうか

◎問３　傍線ウ「二十日の夜」とわざわざ書いたのは何をいおうとしたと考えられるか。次の中から最も適当なものを一つ選べ。

　　Ａ　満月が出て日が暮れてしまったことをいいたい。

　　Ｂ　日が沈んでからもかなり遅くまでといいたい。

　　Ｃ　もう二十日も経ってしまったことをいいたい。

　　Ｄ　下弦の月を船に見立てようとしている。

　　Ｅ　二十日の月の出る方向に海があることを示そうとしている。

問４　傍線エ「その月は海よりぞ出でける」という箇所に見られる表現の面白さについて説明した文章として、次の中から最も適当なものを一つ選べ。

Ａ　京では山の端から出るはずの月を海から出るとした面白さ。

Ｂ　水平線を描いて広がる海と垂直に上がる円形の月との対比による面白さ。

Ｃ　月の形を船に見立てて海に浮かべたような映像になる面白さ。

Ｄ　月の形を弓に見立て、昇る速さを弓から放たれた矢に見立てる面白さ。

Ｅ　月の光の白さと夜の海の黒さとの対比による面白さ。

問５　仲麿は傍線オ「かかる歌」をどのような文芸として発言したのか、次の中から最も適当なものを一つ選べ。

　　Ａ　からうた　　Ｂ　短歌形式によるやまとうた

　　Ｃ　連歌　　　　Ｄ　別離歌　　Ｅ　羇旅歌

問６　二重傍線ＡからＥの「し」の中で自立語の「し」はどれか。ＡからＥの中で、最も適当なものを一つ選べ。

　　〔　　　　　〕

【確認問題】

１　波線部①～③の動詞の、活用の種類と活用形をそれぞれ答えよ。

　①（　　　行　　　　活用　　　　　形）

　②（　　　行　　　　活用　　　　　形）

　③（　　　行　　　　活用　　　　　形）

２　波線部④・⑤の助動詞の、文法的意味と活用形をそれぞれ答えよ。

　④（　　　　　）・（　　　　　形）

　⑤（　　　　　）・（　　　　　形）

３　点線部Ⅰ～Ⅳの係助詞について、係り結びが成立していないものはどれか。また、このように係り結びが成立しない現象を一般になんというか答えよ。

　記号〔　　　〕・（　　　　　　　　　　　）

【補充問題】

４　紀貫之について説明した次の文章の空欄に当てはまる語句を、Ａは五字で、Ｂは三字で答えよ。

　　紀貫之は、平安時代前期を代表する歌人である。初の勅撰和歌集である『［ Ａ ］』の撰者の一人であり、またその「［ Ｂ ］」の作者でもある。Ｂは和歌の本質や起源などを説いている。

　Ａ＝［　　　　　　　　　　］

　Ｂ＝［　　　　　］

【解答】

問１　Ｂ

問２　Ｅ

問３　Ｂ

問４　Ａ

問５　Ｂ

問６　Ａ

【確認問題】

１　①＝ラ行四段活用終止形

　　②＝ダ行下二段活用連体形

　　③＝ラ行変格活用連用形

２　④＝完了・連用形

　　⑤＝存在・連体形

３　Ⅱ・結びの流れ〔「結びの消滅」も可。「結びの省略」は×。〕

【補充問題】

４　Ａ＝古今和歌集

　　Ｂ＝仮名序

【現代語訳】

　昔、阿倍仲麿といった人は、唐に渡って、帰って来たときに、船に乗るはずの所で、かの国の人が、送別の宴会をして、別れを惜しんで、かの地の漢詩作り（＝唐の国で行われる漢詩作り）などをした。（人々は漢詩作りに）飽き足りなかったのだろうか、二十日の夜の月が出るまでいた。その月は海から出た。これを見て仲麿どのは、「私の国では、このような歌を、神代から神も詠みなさり、今では身分の高い人も、中くらいの人も、低い人もこのように別れを惜しんだり、喜ぶことがあったり、悲しいことがあったりするときには、詠むのだ」と言って詠んだ歌（はこのような歌だった）、

　　青々とした広い海を遠く仰ぎ見ると春日にある三笠の山に出た月だよ

　　（＝三笠の山に出たのと同じ月が出ている）。

と詠んだ。